

第2日 シンポジウム

発題要旨 『サロメ』における「欲望」

玉井 暲

(大阪大学助教授)

サロメが七枚のヴェールの踊りを終え、その褒美にヨカナアンの首を所望すると、たちどころにエロドの拒絶にあう。これに対してサロメはあくまで約束の実行を迫っていくのだが、そのときの台詞にこのようなものがある——「わたし、母の言うことを聞いているのではございませぬ。わたし自身の欲のため、下さいと言っているのです。銀の大皿にのせたヨカナアンの首を。すでにお誓いになりましたわ、エロドさま。お忘れなく。お誓いになったことを。」この台詞は、『サロメ』の最も構造的なもの、つまりドラマティックな要素が希薄との批評が一般的な中において、この劇を最も劇的にしている中核的なものを表しているように思われる。それは、端的に、サロメの「わたし自身の欲び」‘mine own pleasure’ とエロドの「誓い」‘oath’ との葛藤だと言えよう。

‘pleasure’ はワイルド文学にあっては重要なキーワードの一つである。それは、テキストの中では、欲び、願望達成から、快楽、性的欲望に至る多義的な意味合いを帯びて出現する。『サロメ』においては、それは、性的快楽、衝動、欲望といった、愛(エロス)の根源的なレベルで捉えるべき言葉であろう。このサロメの‘desire’にあい対するエロドの「誓い」は、単なる個人の言葉、一私人の発言ではない。ユダヤのテトラルク、国王という地位にいる者が発する言葉、ひとたび口にすれば安易には取り消すことのできない言葉、つまり法の言葉であって、制度を代表する。こうしてここに、欲望対制度という基本的図式が浮かび上がる。

もっともこの図式に対して、ヨカナアンという宗教・聖性・道徳を表す第三の点をもうけて三角形を想定することも可能だ。ただし、エロド→サロメ→ヨカナアン、さらには(エロディアスの小姓→)若いシリア人→サロメ→ヨカナアン、エロディアス→エロド→サロメといった三角関係が劇中に見られるにしても、いずれもその根底に横たわっているのは「欲望」であるから、ここでは大きくは欲望対制度(・宗教)の図式に収斂させることが可能だと考え、第三の要素はこの図式における葛藤をより動的に激化させる機能を果たしている要素と見ることにして。この葛藤は、サロメがヨカナアンの切られた首の口にくちづけをし、欲望に耽るさ中(fellatio, cunnilingusの行為と解する見方がある²⁾)に、エロド国王より、法に裏付けされた命令、制度に保証された死刑執行権が執行されるに至り、ここに絶頂を迎え、劇は終わる。

ワイルドのサロメの新しさは、おのれの欲望を完遂することに邁進する姿と深く関わっている。彼女の欲望／愛は、その対象に対してあたかも物に接するがごとく向かって、それへの愛の描写の言葉を重ねることでその完全なる所有を求めているかに見える。ヨカナアンの肉体を初めて見るやいなや 'amorous' になる場面に見て取れるように、白い肉体、黒い髪の毛に恋をした、さわらせておくれ、赤い口を恋した、くちづけさせておくれ、といったぐあいに、男性の肉体の部分部分に対する「恋」を語る言葉が断片的に並置されていくだけである。こうしてサロメの台詞それ自体の構造のなかに現出する愛のかたちはフェティッシュな愛と呼ぶことができようが、それは、なにも劇の終りの切られた首へのくちづけだけに限らない。ただ念を押すべきは、この終りのシーンにおいてサロメのフェティシズムの特質が一挙に顕在化されていることである。ヨカナアンの口、目、まぶた、舌、首、体、髪の毛、声の各々それ自体に向けられた「欲望」の言葉が、シークエンスの形成に逆らうかのようにカタログ的に列挙されている。

サロメのこの 'desire' に対して、秩序の管理者・国王としては予言者ヨカナアンの首を切ることも自らの「誓い」を破ることもできないという二重拘束ダブルバインドに陥ったエロドは、彼女の本質のフェティシズムを見抜いているかのごとく、王国の半分、エメラルド、白孔雀、種々の宝石、司祭のマント、聖壇の幕といった「物」からなる代替物でもって立ち向かう。サロメは、この「制度」の条件にも譲歩せず、自分自身の欲望の実現を貫こうとしたため、文字通り制度の「楯で圧殺」され、プロットの上では敗北を喫する。しかしこの圧殺によって、ヨカナアンの首の占有（「制度」の失点）、フェティッシュな愛の徹底性が実現されたのであり、ここに表象される「欲望」のラディカルな遂行のかたちこそ『サロメ』のインパクトに結びつくものではあるまいか。

注：1) Cf. Regenia Gagnier, *Idylls of the Marketplace: Oscar Wilde and the Victorian Public* (Stanford UP., 1986), pp. 165-71.

2) Cf. Richard Dellamora, "Traversing the Feminine in Oscar Wilde's *Salomé*," in *Victorian Sages and Cultural Discourse*, ed., Thais E. Morgan (Rutgers UP., 1990), pp. 246-64.

発題要旨 『サロメ』における観念としての美

三 国 宣 子
(早稲田大学講師)

ワイルドの美学は一種のプラトニズム美学であるとの観点から、私は『サロメ』を読み